

# 生産と消費の超経済学

——予備的分析——

神 武 庸 四 郎

## I 問題の所在

生産と消費の経済学的な分析の試みは経済学説史のなかに枚挙しきれぬほど見出され、文字通り、汗牛充棟のおもむきがあるといえよう。もとより、ここでなにがしかの議論を展開して新たな学説を追加しようなどという大それた願望を私は些かも抱いてはいない。むしろ、生産や消費の経済学的な考察や両者の関係の理論的分析の背後にあって減多に反省されることなく取り残されている諸問題——とりわけ生産という現象に起動力を与える契機や消費の行き着く先——を考え直してみよう、というのが本稿を書き上げる上で私の最大の関心事である。

とはいっても、これらの問題はいままでまったく検討されることがなかったというわけではない。検討されても経済学の主流とはなりえなかっただけである。たとえば、ソースタイン・ヴェブレンやニコラス・ジョージエック＝レーゲンの個性的な研究が直ちに想起されるであろう<sup>1)</sup>。彼らは経済学とは区別される他の諸科学——社会学、心理学、熱力学、統計力学等々——を無意識的にか意識的に援用して独自の観点と研究方法を提示し、経済学の守備範囲を大いに拡張させた。しかしそうした試みは、確かに或る面で有効な批判的意味をもち一定の影響力を及ぼしたけれども、なんらかの統一的かつ普遍的な方法意識や「哲学」に基づいておこなわれたわけではなかった。ヴェブレンは、「衒示的消費 (conspicuous consumption)」という命名法に象徴されるごとく、「動機づけ」に力点を置きすぎているし、ジョージエ

スク＝レーゲンは、たとえば「生産関数」のようなアパレイタスに執着するあまり既成の経済理論モデルを根底から覆すことのできる新たな枠組みを提示しえていない。そこで、ある種の一般的な方法に還元しうるような形で問題を処理するために私は経済学に対する超越的な立場を意識して分析の視点を定めようと思う。その視点は超経済学 (Metaökonomik, metaeconomics) と称されるべきものである<sup>2)</sup>。そこでまず、超経済学なるものを当面の関心に引きつけて限定することからはじめよう。

## II 超経済学の基本的課題

あらかじめ、基礎的な諸概念を目的論的な立場にそくして類別しておこう。当然のことではあるが、目的論的行為という観点から技術、科学および宗教の概念的区別が可能である<sup>3)</sup>。第一に、技術とは有限の目的の措定された目的論的行為の形である。このばあい「有限」とは具体性、実現可能性を意味しているであろう。第二に、この観点から把捉されうる科学の概念は、無限の目的をもつ目的論的行為の形として規定される。科学にとって無限の目的とは真理である。真理は有限の目的を含む限りにおいて具体的かつ現実的であるが、それを超えた目的を指向する真理は抽象的であり理念的である。真理の相対性は科学にとって絶対的な基準を構成する。というのは、真理の絶対化は宗教への志向をもたらすからである。そこで最後に宗教についても、当面の観点からその輪郭を明示しておこう。すなわち、科学と同じく無限の目的をもつ目的論的行為の形でありながら、その目的である真理の絶対性が措定されるとき、そうした行為の形は宗教となる。このばあいの「形」は人間が人間を外化したところに成立する形であり、それはさらに抽象化され理念化されて「絶対者」を構成する。この「絶対者」はイデーとして非現実の理念像となる。したがって、理念的には教会組織や偶像のような物象は純粹の宗教からは排除されるはずである。

さて、以上のような目的論的な観点から規定された技術の概念が超経済学の始元をなしている。というのは、この意味における技術の諸構造を解明す

ることが超経済学の主題だからである。そのばあいの解明の仕方は諸構造の内容・相互関係を論理的に分析することである。この点で通常の技術哲学とは区別されうるが、そればかりではない。超経済学はまた、こうした研究課題の特性ゆえに多様な技術学(テクノロジー)とも一線を画した領域を形成することになる。ところで、超経済学固有の領域は、その研究方法(構造分析)の適用される対象の特質に応じて二つに区分されるであろう。第一のものは存在論的超経済学である。ここではいろいろな経済学の集合の存在と構成を可能にする理論的構造が対象となるので、「要素」としての「経済学」の構造分析がその主題となりうる。いわゆる経済学説史研究のなかにこの種の分析が散見される<sup>4)</sup>。第二は規範的超経済学であって、主に経済政策の実践的意味を限定する規範的構造が対象となる。「厚生経済学」の原理的な規準となっている「パレート最適」やそれに代替しうる諸規範——たとえば「正義」や「公正」——の意味づけがこの分野における研究課題となりうる<sup>5)</sup>。以下の議論は主として存在論的超経済学の立場から展開されることになるう。

### III 「生産力」の超経済学的分析

第一の課題として取り上げられるべきものは生産の起動力である。それは——往々にして多義的ではあるが——「生産力」という言葉によって表現されている。しかし、通常はそうした意味づけにまで遡って「生産力」というカテゴリーが用いられているわけではない。むしろその事実こそが「生産力」を分析対象とする根拠なのである。

さて、「生産力」という言葉が経済学説史のうえで多様な意味の付与されたカテゴリーであることは確かであるが、しかし、その意味内容を掘り下げて解釈しようような視点はなかなか提起されてこない。そこでまず、「生産力」の概念史を簡潔に要約しておこう。

「生産力」の意味の系統は、大きく分けて三つの流れに類別されうる。第一は生産性(productivity)として「生産力」を解釈しようとする立場であ

る。そこで問題となるのは数学的に表される「連続」や「無限」の形式的構造に対応しうる形に組み立てられた「限界的 (marginal)」「生産力」が主題となる。いわゆる限界生産力説においては、消費モデルとのアナロジーで副次的位置をしめるにすぎない「生産<sup>6)</sup>」を構成する諸要素が微分可能な、滑らかな数的存在に置き換えられている。第二は社会的分業に表現される「生産力」、すなわち個々の人間の集合体としての「生産諸力」である。その概念は、マルクス以降、マルクス主義者によって繰り返し公式的に論じられてきた。その——なかば不毛な——論争史にはいり込むつもりはないが、ひとつの重要な論点には言及しておく必要がある。たとえば、哲学者三木清によって展開されているような「生産関係」と「生産力」との区別である。彼は「生産力」を、他の(存在の)カテゴリー、したがって「生産関係」ならびにそれを規定するいろいろなカテゴリーによってしか表されえない概念と見なした<sup>7)</sup>。その意味において「生産力」はメタカテゴリー——マルティン・ハイデッガーのいい方では「諸実存範疇 (Existenzialen)<sup>8)</sup>」——と考えられるべきである、というのが三木の所論である。彼の意図は明瞭である。すなわち、彼は「生産力」を「歴史」を担う主体としての Tatsache に還元しようとしたのである。この見方は「生産力」の第三の意味と密接に関連してくる。それはフリードリヒ・リストによって展開された「生産諸力の理論」における「生産力」の意味にはかならない。周知のように、リストは「生産諸力」の担い手という観点を強調することによって「生産力」を人格ないし人間と読み替える根拠を示した<sup>9)</sup>。

これら三つの「生産力」の意味を、目的論的な観点から整理し直してみよう。超経済学的な観点から「生産力」の類型化を試みようというわけである。

前述の超経済学の意義、ことに存在論的超経済学のそれにしたがって、「生産力」の概念は以下の三つに類型化されうる。

- [1] 純経済的に限定された目的論から導かれる「生産力」概念
- [2] 社会的観点から構成された「生産力」概念
- [3] 存在論的な観点によって構成された「生産力」概念

最後の「生産力」概念こそが、多様な意味合いで用いられる諸「生産力」概念の根底に「共通項」として存在しているのである。すなわち、[3]の『「生産力」＝人間』説は最も普遍的な意義をもった概念規定と見なされる。ここから「生産力」概念の経済的意義もまた浮上してくるのである。

「生産力」は、担われうる或るモノである。それを意識して担うのは人間、しかも人間だけである。もっぱら機能という側面から担われているにすぎない「生産力」はもはや人間には属していない。それは機械に所属する、カテゴリー化した「生産力」、その意味で労働力である。したがって「生産力」は人間と一体化したときにのみ意味をもつメタカテゴリーなのである。かつてシュンペーターが「企業者 (Unternehmer)」と名づけた「新結合の遂行 (Durchsetzung neuer Kombinationen)」を担う主体<sup>10)</sup>、またマルクスが『資本論』のなかで詳細に描いて見せているような、資本家的工場制のもとで矛盾にみちた存在として出現してくる「直接」生産者としての「労働者」、あるいは、ジェームズ・ワットを原型とする、「自然」科学の目的論的な構造変換を推進してきた技術者、これらはすべて「生産力」を表す名称である。しかし資本主義という経済システムの構造は、シュンペーターの規定した「企業者」を育成するシステムを内在させてはいない<sup>11)</sup>、「労働者」を矛盾した状況から救済する術を持ち合わせてもいない。またそれは本来の技術者の姿を保存しうる能力を具えているわけでもない。「生産力」を表現するそれらの名称が本来の意味を喪失するとき、そのときこそは「生産力」が労働力として機械に同化してしまう歴史時代でもある。その時代はまさに20世紀後半の世界に姿を現した。サイバネティックスを提唱したノーバート・ウィナーの啓蒙的著作『人間機械論<sup>12)</sup>』に描かれているごとく、機械は人間に限りなく接近する一方、人間のほうもますます機械との距離を縮めて「機械人間」化しつつある。「機械人間」を部分機械とする巨大な機械システムとして「官僚制」が社会的な諸組織の全面を覆い尽くしてしまった<sup>13)</sup>。そこでは人間相互の社会関係は「機械」相互のシステム的關係に置き換えられている。

そこでひとつの論点を提起してみよう。いうまでもなく、すべての「生産力」の担い手、あるいは端的に「生産力」は教育システムによって「生産」される。理念的にそれはまず、社会を構成する単位としての家族 (cellule familiale) のなかで育成されるが、続いて徐々に拡張する社会的諸関係によって陶冶される。とりわけ学校制度はこの過程を方向づけていくべきものと考えられている。「生産力」の具えるべき知性 (知力) は学力によって補強されなければならない。そのばあいには、基礎となる学力はどのような属性をもっているのだろうか。おそらく、それは質的に異なる3種類の能力からなっているように思われる。第一は直観的能力であり、文学や美術や音楽の学習を通じて実現される感性の陶冶によって養成される。第二は論理的思考能力であって、主に計算能力と証明の理解力を媒介とした数学的な悟性の働きや外国語の習得によって培われる。最後の、最も重要な能力は総合力ないし構想力である。多様な知識を結合し造形化する理性の力がそれであって、とくに哲学の学習によってこの能力は涵養されるであろう。これらの能力がとりわけ大学・大学院教育の過程で必要十分な形で修得されることにより、「生産力」としての人間はようやく「誕生」するにいたる。そしてその「生産力」＝人間は未来に連なる社会を創造する役割を担うはずの存在である。

ところが、20世紀後半の世界史の只なかで「生産力」の機械への同化ないし労働力への転化はほかならぬ「疎外状況」とともに着実に進行してきた。社会の諸制度は疎外された構造として、「生産力」とは相いれない「自然」を創出する一方、社会の大勢をしめる「機械人間」は「機械人間」以上の「高次の」「生産力」を決して創造しえない。たとえば日本におけるごとく、「生産力」の目的論的構造について無自覚かつ無定見な役人——彼らは「官僚制」という機械システムの部分機械である！——が教育システムを牛耳っている状況は、シュンペーターが危惧した事態をさらに悪い方向に向けている<sup>14)</sup>。政治学者丸山眞男によって「無責任の体系<sup>15)</sup>」と名づけられた特徴を具える社会構造のもとで、役人に宥め賺された「学識経験者」や「政治家」の無思慮な、その場かぎりの判断に基づいて教育システムが管理されるとき、

どんなことが起こるであろうか。しかし、この問いについてなにがしかの答えを出そうと試みることはペシミズムを喚起するばかりなので、当面は論点を変更してこの問題を回避するほうが賢明であろう。つまり、今度は観点を切替えて、必ずしも既成の経済学によっては的確に把握されていない消費の構造との関連から「生産力」の存在態様を見定めることにしよう、というのである。

#### IV 「姿態変換モノイド」の媒介的意義

これまで「生産力」の起動力としての意義について一応の見通しを与えたので、つぎには生産の到達点と見なされる——実はそうではないが——消費の超経済学的な意義の考察に移ろう。ここで検討されるのは消費の「結果」にかんする多様な問題領域である。とはいえ、私はこの問題を一般的かつ普遍的な方法論的視点から取り上げるつもりはない。そのためにはたぶん一冊の書物を必要とするであろう。むしろ、ひとつの超経済学的なカテゴリー——「姿態変換モノイド」——を手がかりにして問題の輪郭を明らかにすることに焦点を合わせてみたいと思う。

##### [1] 「資本」の構造

「姿態変換モノイド」は論理的には「姿態変換群」から導かれる。しかし「姿態変換群」についての詳論は別の文献の参照を求めることにして<sup>16)</sup>、ここではその前提となる「資本」の構造の形式的な制作だけに課題を限定しておく。

まず、最も本源的な構造は「自己増殖する価値」としての「資本」の運動形式である。「抽象的な富」ないし貨幣を  $G$  で表そう。いわゆる「集積 (Konzentration)」ないし「蓄積」を  $\in$ 、「集中 (Zentralisation)」を  $\cup$  で示すことにより、「自己増殖」の形式的過程は

$$G \in (G) \in \{G, \{G\}\} \in \{G, \{G\}, \{G, \{G\}\}\} \in \dots \dots \dots \textcircled{1}$$

$$\begin{array}{ccccccc} \parallel & \parallel & \parallel & & \parallel & & \\ \mathfrak{G}_0 \in \mathfrak{G}_1 & \in \mathfrak{G}_2 & & & \in \mathfrak{G}_3 & \in & \dots \dots \dots \textcircled{2} \end{array}$$

という記号列と、

$$\mathcal{G}_h \in \mathcal{G}_i, \mathcal{G}_j \in \mathcal{G}_k \Leftrightarrow \mathcal{G}_h \cup \mathcal{G}_j \in \mathcal{G}_i \cup \mathcal{G}_k \quad (h, i, j, k \text{ は異なる自然数})$$

という、関係 $\in$ が「安定的である」ことの数学的条件によって表現される。このように記号列と「安定」条件とを定めた当然の結果として、①ないし②の記号列は数学的に全順序半群の構造を表している。他方、(マルクス流の用語法にそくして)経済学的に解釈すれば、その構造は狭義において「利子生み資本」の運動の表現であるが、さらに一般化すれば「資本」の運動の抽象的構造であると考えられる。したがって、①ないし②の記号列に対してはとくに「自己増殖半群」という新たな名称が与えられるべきであろう。なお、①の記号列は周知の順序数の構成に倣って組み立てられているが、のちに同じ形式の「増殖」過程の分析が「廃棄物」についても試みられるであろう。

つぎに、「自己増殖半群」の要素を改めて  $G$  と記し、商品を  $W$  で表すならば、自律的な運動をおこなう「交換モデル」が構成される。 $G$  と  $W$  による置換表現を想定し、或る種の「法則」を記述する写像を  $\Phi$ 、 $\Phi(G) = W$ 、 $\Phi(W) = G$ 、 $\Phi \cdot \Phi = i$  (恒等写像)、 $\Phi^{-1} = \Phi$ 、とすれば、 $\{i, \Phi\}$  は2次の対称群をなすことが知られている<sup>17)</sup>。この「交換モデル」こそは、資本主義のシステムのもとで生産と消費を媒介する自律的な、無限に反復する循環構造にほかならない<sup>18)</sup>。その認識から姿態変換の過程が論理的に導出され、マルクスの経済理論が本格的に展開される。しかし、彼の理論モデルにこれ以上深入りするのは避けることにしよう<sup>19)</sup>。

ところで、すでに別稿で示唆したように<sup>20)</sup>、「姿態変換群」を「姿態変換モノイド」と見なすことは——生産資本から商品資本への直接的移行過程は資本主義のもとでは生産過程そのものであるから捨象不可能である、という事情を考慮して——商品資本から貨幣資本への、および貨幣資本から生産資本への直接的な移行過程の捨象を意味する。しかし、姿態変換の運動においては貨幣資本から生産資本への直接的な移行はありえない。とすれば、ここで結果的に捨象されるのは市場であろう。こうした観点の切替えはいかなる論理的な結果をもたらすであろうか。結論を先取りしていえば、それは姿態

変換運動を商品(もっと一般的に財)と消費との関係として把握することに帰着するはずである。

[2] 姿態変換の「新しい」構造——個別過程——

マルクスがはじめて厳密に規定した姿態変換の運動はそれ自体ひとつの構造であり、その構造の分析は彼の著書『資本論』のなかで詳しく展開されている。しかし、「姿態変換モノイド」という面から姿態変換運動の構造をどのように表現できるか、というのがここで取り上げられるべき問題である。それは姿態変換の個別的な過程に見られる「新しい」構造の分析に帰着するであろう。そのために若干の記号法を(既出のものも含めて)以下のように定めておく。

$W$  : 商品

$A$  : 労働力

$PM'$  : 生産手段

$PM$  : 「価値」の減じる生産手段

$\mathfrak{R}$  : 消費

$\mathfrak{M}$  : 廃物・ゴミ (Müll)

これらの記号法にしたがってつぎのような三つの個別過程が表現される。

(1) 生産としての消費過程

これには二つの局面が区別される。第一は労働力が生産過程の内部で消費されて生産が実現される局面である。時間的順序を矢印で表してこの局面を記号列で示せば

$$W(A) \rightarrow \mathfrak{R} \rightarrow W(A) \rightarrow \dots\dots\dots \textcircled{3}$$

となる。第二の局面は生産手段が消費されて生産がおこなわれ、「価値」の部分移転が生じる局面である。これも③と同様の記号列で

$$W(PM') \rightarrow \mathfrak{R} \rightarrow W(PM) \rightarrow \dots\dots\dots \textcircled{4}$$

と表される。いずれの局面も、マルクスの記述している理論モデルにおいては可逆的な過程として原理的に把握されている。もちろん、観点の切り替えによってこの可逆過程は局所的なものともなりうる。

## (2) 消費としての消費の過程

商品が消費され、消費された商品が廃物に転化する過程は消費としての消費の過程とよばれる。これは記号列で、 $W \rightarrow \mathfrak{R} \rightarrow \mathfrak{M}$ 、と表されるが、 $\mathfrak{M}$ の累積過程を数学者の用いる順序数の構成手順にならって  $\{ \}$  を用いて表示してみれば、つぎのような統一的な記号列がえられるであろう。ただし、ここでは  $\in$  が  $\Rightarrow$  に置き換えられている。

$$W \rightarrow \mathfrak{R} \rightarrow \mathfrak{M} (\mathfrak{M} \Rightarrow \{\mathfrak{M}\} \Rightarrow \{\mathfrak{M}, \{\mathfrak{M}\}\} \Rightarrow \{\mathfrak{M}, \{\mathfrak{M}, \{\mathfrak{M}\}\}\} \Rightarrow \dots) \dots \dots \textcircled{5}$$

既述の通り、この記号列によって表現されている過程は形式的な数学的構造として順序半群の構造によって表現される。また、 $\mathfrak{M}$  を 0 に置き換えれば

$$0 \in \{0\} \in \{0, \{0\}\} \in \{0, \{0, \{0\}\}\} \dots$$

という順序数の生成過程が導かれるであろう。その過程には無限に続く「自由な」経路が保障されているが、他方、 $\textcircled{5}$ の過程＝構造は人間の存在可能性を消滅させる、不可逆的な「死出の旅<sup>21)</sup>」でもある。

ところで、この構造は二重の不可逆的な過程を含んでいる。商品が廃物になる過程と廃物の累積する過程とである。前者の過程は逆の過程（商品の「再生」ないし「再利用」）を含んでいるが、後者の過程はひとたび開始すると深刻な事態を引き起こすであろう。まず、廃物の累積は、文字通り「ゴミの山」や汚泥の打ち寄せる波打ち際などの「新しい景観」やダイオキシンなどの「新しい物質」を創り出し人間の生命にとって有用かつ不可欠な自然環境の破壊に繋がりうる。もとより、人間が存在しなくとも自然環境は人間の、さらには生命体一般の生息不可能な環境として永続していくことになる。つぎに、廃物の累積は、経済活動の目的論的構造にそぐわないために廃物と見なされる人間の累積としても現れる。「老人」、「落ちこぼれ」、「異端者」、「変人」等々の名称でよばれる「廃物」の処理、いま少し婉曲な表現を使えば、機械としての性能に乏しい労働力の社会的「淘汰」が絶え間なく強行される。

## (3) 原始過程

最後に、生産に起動力を与えて生産の始点を形成する過程が想定される。

それは原始過程と称される。原始過程は不連続で不可逆的な過程であり、二つの局面の合成結果として現れる。第一は、既述の「生産力」の形成局面である。それは商品生産を担う労働力としての人間の「個体発生」、人間＝「生産力」の労働市場への投入である。第二は自然(原自然)および「対象化された」自然ないし「人間的」自然からの生産手段の連続的収奪の局面である<sup>22)</sup>。

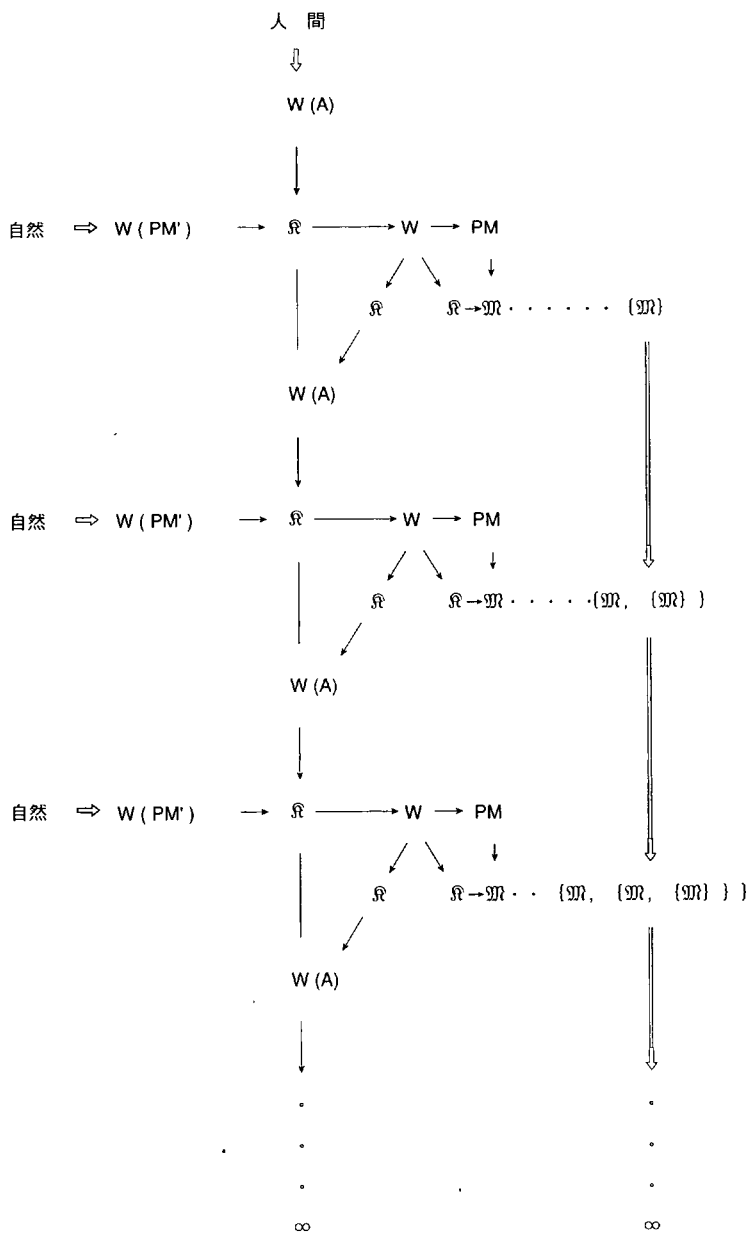
### [3] 姿態変換の「新しい」構造——全体過程図式——

さて、つぎに上述の個別過程の記号列を相互に関連づけて全体的な過程にまとめあげ、その像型を図式化しておこう。

全運動の起動力は、無論、「生産力」としての人間である(第一の原始過程)。しかし資本主義のシステムは「生産力」を、商品生産にもっぱら局限された労働力という窮屈なカテゴリーにはめ込んでしまう。かくて人間の労働力は消費 $\mathfrak{R}$ を媒介にして下方に向かう循環運動を惹起する(③)。同じくこの $\mathfrak{R}$ を挟んで自然——原自然と「対象化された」自然——から繰り返し収奪される——すなわち、第二の原始過程を経由した——生産手段  $W(PM')$  が商品  $W$  を生産する  $PM$  に転化する(④)。  $PM$  は漸次的に「価値」を喪失していく。そしてついには $\mathfrak{M}$ となって⑤の過程に合流する( $PM$  から下に向かう矢印)。

他方、商品  $W$  の消費は労働力の再生産に繋がる局面( $W \rightarrow \mathfrak{R} \rightarrow W(A)$ )と廃物を産み出す局面( $W \rightarrow \mathfrak{R} \rightarrow \mathfrak{M}$ )とをもっている。ここで生じた廃物 $\mathfrak{M}$ は同じく廃物化した生産手段とともに累積過程にはいり自己運動を展開する(⑤の過程であり、下図では右側の二重線の下向き矢印で表示されている)。

以上の諸過程を合成して図解したものが下図である。そこには姿態変換の背後にあって人間の全経済生活を包括する反復運動が表現されている。それは循環運動ではなくて反復運動であることが注意されなくてはならない。というのは、図解された全体過程は総体として不可逆的な構造を絶え間なく創り出しているからである。元の状態に回帰しうる運動も構造もそこにはまっ



たく見出されない。

ところで、この全体過程図式にはなお重大な欠落部分が隠されている。最後にこの点について簡単にコメントを加え本稿を締めくくことにしよう。

#### V 「生産力」の終末——結びに代えて——

姿態変換の全体過程図式に欠落しているのは、「生産力」としての人間の廃物化の過程である。生産と消費の関係を営利によって媒介する社会システムとしての資本主義と、それを「計画」——ないしはその「理念」——によって媒介する社会システムとしての社会主義との対比に関係づけてこの過程を総括しよう。

まず、資本主義のもとでは人間は労働力として機能しえなくなった途端、廃物として扱われ「処理」される。もちろん殺されるわけではないが、生きる場所を着実に奪われていく。ときには、血液や臓器や「春」を売るほかに生きる手だてのない人々も現れる。人間が「生産力」として具えている多様な能力のかなりの部分は機械の判断にそくして見捨てられ、労働力として、したがってまた機械「部品」として意味のある属性だけが限定的に評価されるのである。そこには豊かな感性や創造的な理性の活かされる場所も限られている。商品「価値」がないか、または営利計算にそぐわない科学や哲学の研究ないし芸術活動は消滅するほかはないのである。

他方、資本主義に「対抗」しうる理念として生まれた社会主義がまがりなりにもロシアその他の非資本主義諸国で「誕生」したのち、生産と消費との計画的「調整」は暴力的な「徴発」や特権的官僚による「横流し」等々の「経済外的」公権力によっておこなわれた。社会主義の「理念」は、想像力の伴わない骨化した官僚制的社会主義となって「実現」され、ついには破綻した。しかし、その後に続く「現代」世界に残された経済システムは、これまた官僚制化して「企業者」を産出できない資本家的「生産様式」、あるいは役人のばらまく「餌」に群がって利益をあげ「市場」の権益を国家に擁護してもらっている「利権漁り」の跋扈する「国家資本主義」——まさに自己

矛盾に陥った資本主義——だけである。そこでは、なかば必然の結果として、合理的に「考える」機械の能力に即応した悟性的な、あまりにも悟性的な人間＝機械ばかりが絶え間なく産出されている。この局面のもつ歴史的な意味は重大である。というのは、「歴史家」シュンペーターが資本主義の「自動崩壊」を根拠づけるうえで取り上げた論点もこの点と密接なかかわりをもっているからである。彼は資本主義の「解体」にいたる諸契機を具体的事実に基づいて叙述的に——時には冗長に——説明しているが、そこに示唆されている論理はつぎのようにまとめられるであろう。すなわち、資本主義は、それを誕生させその「発展」を推進してきた人間および社会関係を否定する人間および社会関係を創出し、そうすることによってみずからを否定するのである、と<sup>23)</sup>。換言すれば、資本主義はそれに固有の「論理」にしたがって自己の担い手を「廃物化」してしまうのである。この忌まわしい推論は正しいであろうか、それともまちがっているであろうか。おそらく、経済学者とよばれる人々は、真先にこの設問に答えなくてはならないであろう。さもなければ、彼の「存在理由」は消失してしまうことになる。

- 1) Thorstein B. Veblen, *The Theory of Leisure Class: An Economic Study in the Evolution of Institutions*, New York, 1899, 邦訳: ヴェブレン著 (小原敬士訳)『有閑階級の理論』(岩波書店, 1961年), Nicholas Georgescu-Roegen, *The Entropy Law and the Economic Process*, Harvard U. P., 1971, 邦訳: ジョージェスク＝レーゲン著『エントロピー法則と経済過程』(みすず書房, 1993年), 参照。彼らの議論の要点は着想の面白さにあり、またそれに尽きている。しかし彼らはまたアメリカ合衆国の経済学者特有の性質も具えている。ヨーロッパの学問に対する劣等複合に由来する(と思われる)哲学的な浅薄さと体系的な社会批判の観点の欠如である。ジョージェスク＝レーゲンはヨーロッパの出身であるにもかかわらず、マルクスやヘーゲルの学説についてあまりにも通俗的な解釈しかできず、弁証法についての彼の記述は読むにたえないほどの水準である。おそらく、物理学や数学にかんする彼の知見を構造主義的な視角で濾過してみれば、はるかに深い社会認識がえられるかもしれない。もっとも、私自身はそのような作業を試みるつもりは毛頭ないが。

- 2) 超経済学の意義については、拙著『経済学の構造——一つのメタエコノミーク——』(未来社, 1996年), 参照.
- 3) こうした作業をおこなう上で有益な示唆を与えてくれる文献として、まず第一に挙げられるべきものは、三木清の「技術哲学」(『三木清全集』第7巻[岩波書店, 1967年], 所収)である.
- 4) 前掲拙著『経済学の構造』とそこに挙げられている文献を参照.
- 5) この方面の代表的な著作として、塩野谷裕一著『価値理念の構造』(東洋経済新報社, 1984年)がある. とくに、第3編. 参照.
- 6) Luigi L. Pasinetti, *Lectures on the Theory of Production*, 1977, p. 26 (邦訳『生産理論』, 東洋経済新報社, 1979年, 31頁), 参照.
- 7) 三木清「歴史哲学」(『三木清全集』第6巻[岩波書店, 1967年], 所収), 96-97頁, 参照.
- 8) Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Sechzehnte Auflage, Tübingen, 1986, SS. 44-45, 松尾啓吉訳『存在と時間』(勁草書房, 1960年)上巻, 78-79頁, 参照.
- 9) リストの「生産諸力の理論」については、とりあえず、拙著『経済思想とナショナリズム』(青木書店, 1991年), 97-101頁, 参照.
- 10) 周知のことだが、このばあいには「結合」される「新しい」要素は、財貨、生産方法、販路、原料・半製品の供給源および組織の五つである. Joseph Schumpeter, *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, vierte Auflage, 1935, SS. 100-101 (塩野谷・中山・東畑訳『経済発展の理論』[上], 岩波書店, 1977年, 182-183頁), 参照.
- 11) この論点は重要なので、シュンペーターの所論にそくして詳しく吟味しておこう. 官僚制化の進展とともに「企業者」というカテゴリーに適合した人間は存在しにくくなるから、それはいわば「空集合」になってしまう. シュンペーターはこのことを十分に意識していなかったようだ. 実は、「企業者」が「空集合」化するのとはなぜか、という問いのなかに資本主義社会を成立させよう本質的な契機が隠されているのである. 彼が「企業者」と称した「生産力」の構造は確固たる社会的基盤をもちえず、したがって構造としての持続性を容易には確保できない. その意味で「企業者」の構造は偶発的である. マックス・ウェーバーが論文『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(大塚久雄訳, 岩波書店, 1989年刊)において経験的な立場から存在証明を試みた「企業者」像はなんと脆弱で、刹那的な生命力しか持ち合わせていなかったことだろう. だからこそシュンペーターは前述の著書のなかで「企業者」の属性をさまざまな角度から表現しようと

躍起になっているのである。読者の立場からすれば、「企業者」についての退屈きわまりない「説明」が延々と続くわけである。第2次世界大戦中に書かれ戦後に改訂版の出された著作『資本主義・社会主義・民主主義』のなかで明瞭に打ち出されているように、結局のところ彼の議論は、資本主義に不可欠の契機が資本主義の内部からたやすく産出されることはありえないという主張に帰着する（本稿の結論部分と〔注23〕を参照）。すなわち、資本主義は資本主義を否定する、あるいは「企業者」の存在を仮定すると資本主義は矛盾を引き起こすのである。もちろん、封建制や社会主義が「企業者」の創出とはまったく無縁の社会であることはいうまでもない。シュンペーターの描いた「企業者」なるものはあまりにも理念的な理念像にすぎなかった。

- 12) Nobert Wiener, *The Human Use of Human Beings: Cybernetics and Society*, Second Edition, 1954, 邦訳『人間機械論』[第二版], みすず書房, 1979年, 参照.
- 13) この局面の理論的・概念的な論点整理については、拙稿「構造と疎外」(『一橋大学研究年報：経済学研究』40号, 1998年, 所収) および「プロメテウスの宿業——「人間機械」論から「機械人間」論へ——」(『一橋大学研究年報：経済学研究』41号, 1999年, 所収), 参照.
- 14) 彼の議論については、本稿の最後で再び論及されるであろう.
- 15) 丸山眞男『日本の思想』(岩波書店, 1961年), 37-39頁, 参照.
- 16) 詳しい議論については、前掲拙著『経済学の構造』第三章第二節を見よ.
- 17) 前掲書, 118-119頁, 参照.
- 18) この点については、マルクス学説の熱烈な信奉者久留間鮫造が巧みな図式によって解説している。彼は「生産界」と「消費界」とを媒介する「流通界」の自律的な運動をみごとに描いているので、その図解はのちに多くの論者によって利用されている。久留間『(増補新版) 恐慌論研究』(大月書店, 1965年), 189頁, 参照。しかし「流通界」の自律性の強調は生産と消費の構造を根源的に分析する視角の放棄を意味した。その点はまさしくマルクスの経済学説の決定的な限界でもあった.
- 19) 前掲拙著『経済学の構造』, 119頁以下, 参照.
- 20) いくぶん舌足らずな説明ではあるが、前掲拙稿「プロメテウスの宿業」, 80-81頁, 参照.
- 21) この文句は、「鳥は古巣へ帰れども行きて帰らぬ死出の旅」という「間(あい)の山節」の一節から取られている。そこには可逆(循環)過程と不可逆過程とが対照的な形でみごとに表現されているように思われる。因みに、「間の山節」

は中里介山の思想小説『大菩薩峠』のなかで盛んに引用され、その主題に連なる basso ostinato としての機能を担っている。

22) 「自然」の2類型の区別については、前掲拙稿「構造と疎外」を参照せよ。

23) Joseph Schumpeter, *Capitalism, Socialism and Democracy*, 3rd ed., 1950, p. 61 ff (中山・東畑訳『資本主義・社会主義・民主主義』[上], 東洋経済新報社, 1962年, 113頁以下), 参照。いうまでもなく、シュンペーターの試みている「具体的説明」の対象は資本主義の活動領域を狭める株式会社の形成や「利潤動機」の推進主体である「ブルジョア家庭」の崩壊など、どれひとつをとっても理論的な考察を必要とする主題ばかりであって、彼の議論の当否を本格的に検討するためにはこれらのテーマひとつひとつについて社会科学的な取り扱いが必要になるであろう。また、マルクスの試みた「自己増殖する価値」としての「資本」の弁証法的な「運動」の理論的考察をシュンペーターは資本主義の「本質的事実」としての「創造的破壊 (Creative Destruction)」という同じく弁証法的な論理で組み立て直そうとしているので、この側面については歴史哲学的な見地から両者の立論の比較がおこなわれなくてはならないだろう。もとより、当面の理論的考察の射程はそこまで及ばないのであるが、こうした問題領域の「普遍理論」にかんしては、拙稿「歴史の構造」(『一橋大学研究年報：経済学研究』42号, 2000年, 所収予定)が参照されるべきであろう。

(一橋大学大学院経済学研究科教授)